あと５秒。

彪兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あと５秒。

【Ｎコード】

Ｎ０５８８Ｂ

【作者名】

彪兎

【あらすじ】

村上阿華音（むらかみあかね）は、別に特別体が弱いワケじゃなかった。その辺の子より数倍は元気だった。でも突然死神から宣告されたのは『死』――。彼女は最後の１日を、どう過ごす？

・First・

あたしは別に病弱な子なんかじゃなかった。
むしろ、いつもドタバタと遊びまわっていた。
男子と見分けが付かないくらいの元気娘。
それがあたし、村上（むらかみ）　阿華音（あかね）だった。

あたしはその日、なんだか外をブラブラしたい気分になったから、
あてもなく出かけた。
天気はよく、降り注ぐ日差しが気持ちいい。

「たまにはこーやって散歩するのもいいなぁ〜」

ぐっと背伸びをしながら呟いた。
空には雲が浮かび、雀が飛んでいる。
『平和』という言葉がピッタリだった。

そのままあたしは街へ出てみた。
やはり休日は人が多い。
とちあえずコンビニに・・・とだけ思っていたのに、人ゴミに流されてしまいそうになる。

「やっぱ外なんか出るんじゃなかったかも・・・」

自分の行動に早くも後悔し始めていた。

――――――その時だった。

さっきまでうるさく騒いでいた人々の声が消え、静寂に包まれた。

え・・・？

あたしは不安になる。
何が起こっているのだろう？
全てが静かだった。
この世界にはあたしだけ、というような感覚に陥る。

「おい」

声がした。
数十秒だけのはずだったのに、聞こえてきた声がとても久しぶりに聞いたように感じる。
それは正面から聞こえて来ていた。
あたしは目を凝らす。
人ゴミで姿が見えない。
最初に見えたのは黒いキャップ帽。
それから黒い髪。

男だ。

そこまでやっと分かった。
女にしては背が高過ぎる。
男にしては少し長めの髪が風で揺れていた。
声の主の姿が見えてくる。

黒いTシャツにGパン。
あたしはソイツをじっと見る。
するとソイツが顔を上げて、あたしと目が合った。

ゴゥッ・・・

強い風が吹いた様な音がした。
次の瞬間には、聴覚が戻っていた。
また耳障りな大勢の騒ぎ声に包まれる。
突然の出来事に、あたしは混乱しきっていた。

「・・・!?え!?何なの・・・!?」

一人戸惑っていると、ソイツが近付いて来た。
あたしはハッと顔を上げる。
だがソイツは何も言わなかった。

「・・・・・」

半笑いを浮かべた顔で、あたしの横をすり抜けようとした———

瞬間だった。

ソイツが、ボソリと言った。

「————アンタ、もうすぐ終わるよ」

――――――え？

何？何が終わるって？

「ちょ・・・ちょっと待ってよ！」

あたしは瞬間的に、ソイツの腕を掴んでいた。
いつの間にかあたしの顔には、冷や汗が浮かんでいた。
ソイツはやはり、笑っていた。

「クスクス・・・・。知りてぇか？」

心底楽しそうに笑う。
あたしは唾を飲み込み、

「・・・・・知りたい」

嫌な予感がした事に、あたしは気付かないフリをした。

ソイツに連れられて来たのは、狭い路地裏だった。
でもそんなに人気の無い場所ではなく、大勢の騒ぎ声は聞こえたままだ。
あたしは仁王立ちしたまま、ソイツを睨む。

「―――で？何なの？一体・・・」

そう言うと、壁にもたれたソイツは、またクスクスと笑う。
何故かとても癇に障る。
あたしはイラつき気味に聞く。

「ねぇ！早く教えてよ！」

「―――後悔するかもしんねぇぜ？」

「後悔・・・？」

益々意味が分からない。
一体あたしが何をどう後悔するのだ。

「・・・・・後悔なんかしない」

「・・・フ。いい眼だ」

偉そうに腕組みをしながら、『それ』は告げられた。

「――――――アンタ、

死ぬ

んだよ」

頭が、真っ白になった。

・Second・

――――――あたしが死ぬ？

このあたしが？

2年に一回くらいしか風邪をひかないこのあたしが？

「・・・・・嘘」

「嘘なワケないだろう」

ソイツは偉そうに言った。

「だって・・・。なんであたしが死ぬだなんて分かるのよ！？根拠は！？」

あたしがそう叫ぶと、ソイツは鼻で笑った。
やはり何故か一つ一つの動作が癇に障る。

「そう言えばまだ言ってなかったっけ」

ソイツはそれを言うと、右手を宙に掲げた。

「？」

あたしはその手に視線を合わす。
するとそこから黒い渦が生まれた。

「ぇ・・・っ」

あたしが眼を見開いている間にも、その渦は大きさを増す。
そしてその渦は、ソイツを取り巻き始めた。
その渦は真っ黒な衣装となる。
右手に残った渦の塊は次第に長細くなっていく。
それは大鎌となり、銀の光を纏う。

「・・・っ・・・」

あたしは、息を飲む事しか出来なかった。
でも一つ理解出来た。

人間じゃない。

ただ、それだけを。

「・・・っ、ぁ。・・・ぁ、あ」

もう、呻き声しか出なかった。
口を手で押さえ、目をいっぱいに見開いて、足が震えている。
きっとその姿は情けないだろう。
またソイツは薄く笑いを浮かべているのだろう。
でも、その『　驚愕　』と『　恐怖　』の感情は、抑えられなかった。

そして、渦が全て消えると、ソイツは頭を一つ振った。
「・・・なんだか分かる？」
「・・・・・・・・・死神」
小声をで、まるで呻いている様に言うと、ソイツは満足そうに笑い、
「正解」
と言った。
『 死神 』は大鎌を邪魔そうに肩に乗せながら口を開けた。
「・・・で？アンタが死ぬ根拠、分かってくれた？」
「・・・・・・」
どう返事すればいいのか分からなくなり、口を噤む。
確かに、死神なんなら分かる――――――
けど・・・。けど・・・。
やっぱりどこか信じきれず一人勝手に唸り始める。
それを死神は嬉しそうに見る。
「ま、信じる信じないはアンタの勝手さ。村上 阿華音」

「・・・・・ねぇ」

「ん？質問か？」

「まぁ」

あたしは死神にもう震えていない足で一歩近付いた。

「・・・何時に、死ぬの？」

「うーんとなぁ・・・。あと２３時間５６分１１秒だな」

空中のどこかを見つめながら死神は言った。

「じゃあ、あたしは何が起きて死ぬの？事故？」

「あぁ、心肺停止」

さらっと、何気なく言われた。
益々死ぬ実感が遠のいていく。

「・・・・・・・そっか」

「大丈夫だよ。苦しいのは3秒くらいだから。すぐに死ぬよ」

別にあたしはそーゆー事を心配してるワケじゃない。
あたしが少し呆れ顔で死神を見ていると、顔が急にすっと真顔に変わった。

「さぁ――。
　残りの時間、アンタはどう過ごす――――？」

　黒髪の悪魔は、運命を告げた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0588b/

あと５秒。

2010年10月20日13時03分発行